

日本社会福祉教育学会

Japanese Society for the study of Social
Welfare Education

NEWS LETTER No.36

事務局

〒998-8580 山形県酒田市飯森山 3-5-1 東北公益文科大学 小関研究室気付

TEL 0234-41-1288 E-mail: info@jsswe.org <http://jsswe.org/>

2021 年 7 月 31 日発行

目次

1. 巻頭言.....	1
第 11 回研究集会と第 17 回大会を終えて（日本社会福祉教育学会 副会長 白川 充）	1
2. 第 11 回春季研究集会報告.....	2
□■□参加者の声から□■□	3
3. お知らせ.....	4
4. ニュースレター編集委員紹介.....	5
5. 2021 年度年会費納入のお願い.....	7
6. 編集後記.....	7

1. 巻頭言

第 11 回研究集会と第 17 回大会を終えて

日本社会福祉教育学会 副会長 白 川 充（仙台白百合女子大学）

2020 年度役員選挙において理事となり、さらに副会長に選出されました。結果として、大会・研究集会など学会イベントを担当する第 2 委員会の委員長を務めることになりました。2021 年の学会イベントである第 11 回研究集会と第 17 回大会を終えましたので、その成果と課題について振り返ってみたいと思います。

第 11 回研究集会は、コロナ禍における社会福祉教育の現状と今後の課題ー多様化する授業内容と方法に関する事例報告を中心にーというテーマで、3 月 13 日（土）の午後、オンラインで開催しました。

コロナ禍における社会福祉教育は、それぞれの地域の感染状況（地域性）と、養成校の規模とカリキュラムによって、多様な授業形態と内容が展開されています。そこでそれぞれの地域

において、どのような取り組みがなされているのかを把握し、今後の課題となる授業のあり方について検討しました。

日本社会福祉教育学会第 17 回大会は、「社会福祉分野における ICT 活用教育の課題と展望ーウィズ／アフターコロナ時代の社会福祉教育を考えるー」というテーマで、6 月 19 日・20 日にオンラインで開催しました。そのテーマの趣旨は、コロナ禍の中で、全国の社会福祉教育現場が遭遇した ICT 活用教育のあり方について検討するとともに、その経験を今後の ICT 活用教育にどのように生かすか、またその課題について検討することが目的でした。

このふたつの企画そのものは悪くなかったと思うのですが、残念ながら、参加者は少なかったです。3 月の研究集会は 10 数名、6 月の 17 回大会は 30 名前後だったと記憶しています。周知方法にも問題があったかもしれません。それよりも参加者が少ないことの背景には、学会イベントに対する学会員の関心のなさがあるように思います。

社会福祉教育に関する研究課題と切り口は多様です。第 17 回大会では、学会としてオンライン授業における教育方法や教材について継続研究と行おうという提案がありました。この学会には、このような提案が学会としての共同研究となり、そこに学会員が参加する。その研究成果を研究集会や大会で報告するというシステムが必要なのだと思います。

また 2022 年度の第 18 回大会は、すでに中国・四国地域での開催が決まっています。そして 2023 年度の第 19 回大会は、関西での開催を予定しております。企画内容の充実は勿論ですが、広く周知していきたいと思います。ですから、会員の皆さまもどうぞ今後の取り組みと企画に関心をもっていただき、多くの方が参加してくださることを期待しています。

2. 第 11 回春季研究集会報告

去る 2021 年 3 月 13 日（土）、テーマを「コロナ禍における社会福祉教育の現状と今後の課題ー多様化する授業内容と方法に関する事例報告を中心にー」として、オンラインにて開催されました。

コロナ禍終息の兆しが見えず、“with(ウィズ)コロナ”と叫ばれている今、社会福祉教育においても授業形態や内容、方法が多様化してきています。そこで本大会では、東北・関東・関西・四国エリア別にシンポジストの方々より地域の実情をふまえた所属大学の取組み、ご自身が行った授業内容と方法についてご報告いただきました。その上で、コメンテーターより、コロナ禍における社会福祉教育のあり方に関する総合評価及び今後の課題についてコメントをいただきました。

限られた時間ではありましたが、ご参加いただいた皆様と改めて現在の社会福祉教育のあり方について向き合う場となりました。

年度末というお忙しい中、ご参加くださった皆様には厚く御礼申し上げます。



👉 コーディネーター
白川充副会長（仙台白百合女子大学）



👉 シンポジスト
実習教育(実践での学び)の必要性について話をする
村山くみ会員（東北福祉大学）

👉 シンポジスト
代替措置を超えたオンライン教育について話をする
荒井浩道会員（駒澤大学）



□■□参加者の声から□■□



春季研究集会に参加して

大山博幸（十文字学園女子大学）

2021年3月13日に開催されました社会福祉教育学会第11回春季研究集会に参加させていただきました。本研究集会のテーマは「コロナ禍における社会福祉教育の現状と今後の課題ー多様化する授業内容と方法に関する事例報告を中心にー」でした。コロナ禍の中、特に相談援助実習をはじめとする学外実習が中止となった際の代替として求められた学内実習をどう設計し実施するかが、社会福祉士養成課程内で実習教育を担当とする教員におきましては急務であったとされる状況下で、まさにタイムリーなテーマであったと思います。私自身も担当する学内外実習のカリキュラム設計・実施に頭を悩ませておりましたので、本研究集会の内容は大いに示唆いただく機会となりました。シンポジストとしてご登壇された4名の先生方のご報告とそれを受けての2名のコメンテーターの先生方のご指摘やご見解はいずれも重要で興味深い内容であり示唆に富むものでした。またシンポジスト4先生方はそれぞれご所属大学が位置する地域の新型コロナウイルス感染状況を詳細にご報告いただいたことで、あらためてその差異を具体的に認識することができました。ここでは、本研究集会の中で私が個人的に関心を当てた点について述べさせていただきます。それは、実習教育に遠隔授業形態を用いて行うことの可能性と課題についてです。

村山先生からは、zoomや当該学内システムを使用しての同時双方向型およびオンデマンド型授業、そしてキャンパス内での対面授業を組み合わせた学内実習のデザインを詳細にご報告いただき、このようなオンライン技術は今後実習教育に不可欠なものとお



👉シンポジスト

オンラインを活用した「海外体験学習プログラム」について話をする阪口春彦会員（龍谷大学短期大学部）

しゃられています。荒井先生は、昨今求められるア

クティブラーニングやワークショップ形式の授業においては、対面授業をそのままオンライン授業に置き換える”のではなく、オンラインを前提にした授業開発の必要性を強調され、オンラインでできる工夫はまだ多くあることを主張されました。阪口先生からはコロナ禍において生じるニーズに対応するソーシャルワーク実践の必要性を強調されたう



で、実習教育においてはオンライン見学の

シンポジスト👉

グローバル視点を重視した社会福祉教育について話をする高杉公人会員（聖カタリナ大学）

践を、また併せて海外研修やゼミフィールドワークの代替としてオンラインツアーやオンラインフィールドワークの実践を紹介されその特性を示してくださいました。高杉先生からは、社会福祉教育における「グローバル」視点の重要性を述べられたうえで、社協をはじめとする地域領域を対象として遠隔授業形態を用いた学内実習プログラムを紹介いただき、また併せて留学生対象の授業や国際交流関連の授業にICTを活用した実践をご紹介いただきました。

4先生方ともに、遠隔授業形態を教育実践に活用されたうえでその積極的な面をご指摘され、それゆえ質の高い学内実習実践が可能であることをお示しいただいたと思います。このことは従来の授業観（もしくは実習観）を超え、あらためて「授業（実習）とは何か」「授業（実習）をデザインするとはどういうことなのか」といった問いに教員一人ひとりが応えていくことの重要性のご指摘でもあったのではないかと考えます。

また一方、実践の場に行かなければ体験でき



ない感じられない現実があること(村山先生)、遠隔授業のみでは現場のリアルを伝えることの限界がある(高杉先生)といった、教育における直接経験の意味の議論にかかわる根源的な課題についてのご指摘いただいたと思います。このことは、現場(フィールド)でのみ経験される教育的意味の内実は何かという(ある意味古くて新しい)問いにもあらためて応えていくことが明示されたものだと思います。

4 先生のご報告はコロナ禍において遠隔授業を経験した今後の実習教育の方向性を探る



において大いに示唆に富むご報告であったと思います。会の最後

にコーディネーターの白川先生が学内実習をはじめとする遠隔授業を取り入れた社会福祉教育(ソーシャルワーク教育)の成果は今後

👉 コメンテーター
志水幸会長(北海道医療大学)

検証されるべきではないかとご指摘されました。私も強く同意いたしました。

以上 恐縮でございますが、私見とともに感想を述べさせていただきました。本研究集会を企画実



施されました学会の先生方に大変感謝申し上げます。

ありがとうございました。

👉 コーディネーター
宮本雅央会員(青森県立保健大学)

3. お知らせ

ニュースレター第38号は
トライアルでオンライン配信します！

日本社会福祉教育学会は、ニュースレターを2006年から刊行しています。次回の第37号(2021年11月発行予定)は現行通り紙媒体で発行し、第38号(2022年3月発行予定)はトライアルとして学会ウェブサイト上でオンライン配信します。ニュースレターのオンライン化により、オンラインの特性を生かしたコンテンツの拡充を図り、情報のプラットフォーム化と双方向のコミュニケーションの実現を期待しています。それ以降のニュースレターの提供方法については、会員の皆様のご意見・ご感想をもとに検討したいと思います。よりよいニュースレターをお届けしたいと思っていますので、ご協力をよろしくお願いいたします。



コンテンツを募集します！！



イベント開催情報、便利で役に立つ教育ツールや教材、教育実践 tips(コツや秘訣)、おすすめ動画やウェブサイトなど、会員の皆様の情報を学会事務局ニュースレター担当 (nl.jsswe@gmail.com) までお寄せください。新着情報として、学会ウェブサイトやニュースレターで随時紹介していきます。

2021 年 9 月末日までに、ご意見をお待ちしております！！

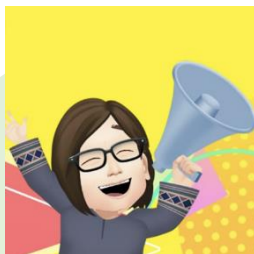


4. ニュースレター編集委員紹介

2021 年度、本学会ニュースレターは、年 3 回の発行を予定しております。発行にあたり、本学会に関する大会・集会に関する内容などを掲載することで、会員の皆様の実践や研究水準を上げ、社会福祉教育の発展に寄与できればと思っております。

人と人が「つながる」ことができ、ニュースレターがより良いものになるように努力してまいります。何卒、よろしくお願い致します。

今年度のニュースレター編集委員をご紹介します！！



西川 ハンナ

東京都八王子市にある創価大学で社会福祉士養成をしています。八王子は京都に次ぐ第二の学園都市ということで若者の多い街です。コロナ禍で去年は集まることはなかなか出来ませんでしたが、ゼミ活動では八王子駅北口商店会のオフィシャルサポーターズとして商店会のブログを学生が遠隔地から記事を書き、

大学周辺に住む学生が状況を確認し写真を撮って掲載し、駅前の七夕飾りのイラ

スト・キャッチコピーを考え掲示して頂き、「学びを止めない」「つながる」方法を模索していました。アクティブに見える一方で、ますます多様化が進む学びの手法に自分の IOT 技術が追い付か「こんな事を覚えてもきっと来年は使わなくなるだろう」と若手の教員につぶやいたところ「いやいや、今後も更に活用は進みますよ」といわれた予言(?)が的中し、今年も更にハイブリッド、ハイフレックス等の授業形態に、内容もさることながら授業開始の段階でも悪戦苦闘しています。しかし、このような状況になって改めて教室に集まる学生の背景を想像し、教室の学習がいかに整った学習環境であったかを理解しました。コロナ禍の創意工夫が一人、一校内にとどまらず社会福祉教育全体の向上につながる情報共有ができればと願っています。社会福祉士養成の演習教育・教材開発にも関心を持っております。ソーシャルワーク教育学校連盟関東甲信越ブロックのソーシャルワーク演習研究会の会員でもあります。その様な関心を持つ皆様と紙面も作成していければと思っております。よろしくお願いいたします。



島谷 綾郁

この度、ニュースレター担当事務局編集委員となりました職業教育研究開発センターの島谷綾郁（しまや あやか）です。現在は育児休業中であり、四六時中、0歳児と時間を共にしております。毎日白眼をむき、眠気と闘い、初めての育児に奮闘しながらも子どもの成長過程をみていると、「まさに、生きる教科書！」と嬉しい反面、「（今日という日は二度と戻らないから）もう少し赤ちゃんでいていいんだよ・・・。」と少し寂しい気持ちにもなる日々を送っております。

前職では、刑務所にて社会福祉士・精神保健福祉士として、罪を犯した障害・高齢受刑者の出所時の調整や各施設機関などとの連携、受刑中の教育プログラムの指導などを約10年担わせていただきました。

支援を行う中、さまざまな境遇の支援対象者と出会い、お話をうかがい、驚いたことや思わず笑ってしまったこと、自分の無力さに震えるくらい悔しかったことなど、学びの多い日々でした。

現職は、職業教育研究開発センター研究員として文部科学省委託事業や海外での学科構築に向けての調整ごとなどに関わらせていただいております。毎日、センター長に鍛えられながら、視野が広がる充実した時間を過ごさせていただいていたな、と育児休業に入り、しみじみと感じました。

現場からは離れてしまいましたが、司法福祉の領域については、今後も研究を続けていきたいと思っております。

現在、社会福祉教育は社会福祉施設や介護、保健医療のみならず、教育や司法分野などにも広がっています。そのような中、日本社会福祉教育学会は、①実践・研究の水準をあげること、②教育法・教授法等の開発を行うこと、③社会福祉教育の関係者間の連携を図ることで社会福祉教育の発展に寄与すること、を目的としてあげております。

より多くの現場の方や研究者の方が本学会に所属し、熱い議論などを行うことで生き生きとした社会福祉教育の発展につながることができればよいなと思っております。そのためにも、会員の皆様方の温かいご意見やご批判を賜りながら、ニュースレター担当事務局編集委員の一人として微力ですがお力になれば幸いです。

現在は、コロナ禍の影響（その他には、個人的に育児休業中）により、学会時など、オンライン上でお会いすることしかできないのが残念ですが、本学会にご所属されておられる会員の皆様と本学会の目的を達成するための想いは同じと思いつつ、頑張りたいと思います！！

安藤 幸

この度、ニュースレター編集委員会の一員となりました安藤 幸（あんどう さち）です。至らない点も多々あるかと存じますが、本学会会員の皆様や編集委員会の委員の皆様から多くを学ばせていただきながら、有益な情報を届けられるように頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

簡単に自己紹介をさせていただきます。私は、日本とアメリカの大学で英語学と心理学をそれぞれ学び、テキサス大学アーリントン校の大学院へ進学してソーシャルワークの修士号と博士号を取得しました。フィラデルフィア郊外にあるワイデナー大学ソーシャルワーク教育センターのアシスタント・プロフェッサーを務めた後、約16年ぶりに日本に帰国。奈良先端科学技術大学院大学教育推進機構の特任講師として理工系大学院の国際化業務に携わり、2018年に現所属の京都大学大学院教育学研究科に専任講師として着任しました。現在は、ソーシャルワーク専門職に必要とされる、共生社会構築に向けた多様性教育のあり方について研究しています。また、ソーシャルワーク専門職教育の国際化（または脱国際化）についても関心があります。さらに、ソーシャルワーク専門職に求められる価値と機能についてコミュニティ・エンパワメントの観点から探究しており、異分野・異業種連携による地域資本の創出・開発にも着目しています。

新型コロナウイルス感染症拡大以来、教育や研究を取り巻く環境は様変わりしてしまいました。キャンパスを行き交う人は依然としてまばらで、学生生活を謳歌する学生の姿も見られません。マスク越しの距離ある対面の会話や、アイコンや黒画面相手の無機質なオンライン授業は、日常の一部となっています。海外はおろか、国内出張の機会もなくなってしまいました。コロナにより、人や社会とのつながりが希薄化したように感じられます。しかし一方で、オンライン化の加速により、国内外の学会やワークショップに気軽に参加できるようになり、情報へのアクセスがしやすくなったとも感じています。また、コロナを機に、学内外の先生とお話する機会が増え、異業種の専門家とも連携の可能性が生まれています。

「日々是幸日」と自分に言い聞かせながら、コロナ禍を過ごしています。失ったものごとを憂えず、今この時にある機会に感謝しながら、日々幸せに過ごしたい・・・。一日も早くコロナが終息し、オンラインの学会で皆様と歓談や意見交換できる日が来ることを楽しみにしています。



5. 2021年度年会費納入のお願い

会員の皆様におかれましては、平時本学会運営にご理解・ご協力をいただき、誠にありがとうございます。

本学会は、会員の皆様の会費を基に「学会誌」や「ニュースレター」刊行等の学会事業を展開しております。

本ニュースレターとともに、**2021年度学会費振込票**を同封しました。ご多忙の折、大変恐れ入りますが、本学会の円滑な運営と維持向上のため、改めてご協力の程、お願い致します。

なお、振込先等の情報は以下となります。

振込手数料につきましては、振込される方のご負担となりますことご了承くださいませようお願い申し上げます。

◆郵便振替口座

口座番号：00800-8-149492

名 義：日本社会福祉教育学会

◆他銀行口座よりお振込いただく場合

店 名：〇八九（ゼロハチキュウ）店

預金種目：当座

口座番号：0149492

名 義：日本社会福祉教育学会



6. 編集後記

編集委員も一新。偶然女性ばかりとなりましたが、それぞれ社会福祉の教育・研究の異なる環境にいたることが分かりました。この多様性を活かしてニュースレターでふくよかな発信ができればと思っております。今年はコロナ禍の二回目の春を迎えました。オンラインで出来ること、対面でこそ伝えられること等教育現場の混乱はまだまだ続いていると思います。昨年NHK等で話題になった「武漢封城日記」（潮出版）は封鎖状態の武漢の様子をソーシャルワーカーの目から綴った記録であり、生活を見つめるソーシャルワーカーの視点が隅々に感じられるものでした。コロナ禍の社会の変化に社会福祉教育は、どのような変化を遂げるのか。そもそも、その変化に気づけるか。コロナ禍により世界はより身近になり、ソーシャルワーク教育のツールや方法もより開示され、社会福祉教育全体の質の向上が期待されるところだと思えます。活動や集合のオンライン化が急速に進化せざるを得なくなった今、本紙の発信方法や会員間のつながりもこれから新しい方法について検討していきたいと考えております。

（ニュースレター担当 西川 ハンナ）

